

「ふるさと」大すき

休みじかん、あきらさん、いっぺいさん、えいじさんの 三人が、バケツのまわりで 楽しそうに あそんでいます。

バケツの 中には、つよそうな ゼリガニが 元気に うごいていました。

そこへ、たろうさんが やってきて 言いました。

「わあ、かっこいい ゼリガニだね。

ぼくにも、さわらせて。」

すると、三人が、

「だめだよ。この ゼリガニは、ぼくたち 三人で つかまえたんだから。たろうくんの 家は、とおいから いつも いっしょに あそべないだろ。」

と 言いました。たろうさんは、なみだが でそうになりました。

三人は、いつも 学校から かえってから いっしょに あそんでいます。

あきらさんの 家の ちかくには 小川が あるので、ゼリガニとりを します。

いっぺいさんの 家に行つたときには、ちかくに やさしい おじいさんたちが すんでいるので こままわしを 教えてもらいます。

えいじさんの 家の まわりには、ひろばが あるので ボールあそびを します。

でも、たろうさんの 家は、とおい 山のほうに あります。バスで



学校に かよって いるので、みんなとは、あそべないのです。

その夜、たろうさんは、お母さんの まえで ないていました。

「ぼく、こんな 山のほうに すみたくないよ。ぼくも、みんなと あそびたいよ……。」

お母さんは こまっけてしまいました。

次の日の朝、たろうさんが おきると お父さんが、手に なにか うごくものを もっていました。

「たろう ほら、カブトムシを とってきたぞ。学校に もっていくといいよ。」

たろうさんは、うれしそうに 学校に 行きました。

休み時間、カブトムシの まわりに みんなが あつまってきました。

「すごい。」

「かっこいい。」

「つよそうだね。」

みんな くちぐちに 言いました。たろうさんは、

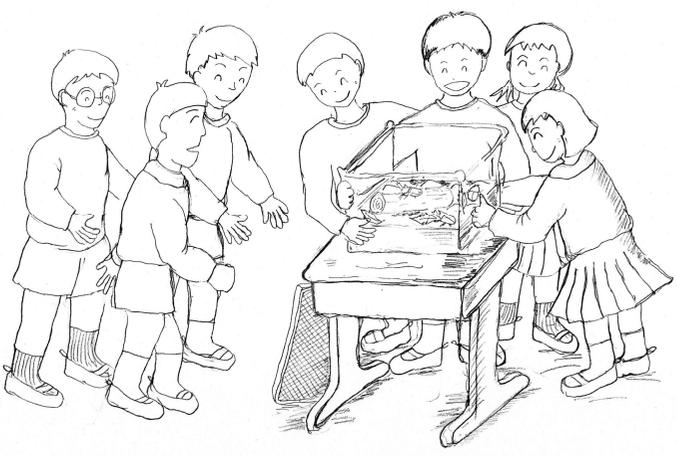
「ぼくの 家の まわりには、カブトムシ

や クワガタが たくさん いるんだよ。

みんな、さわって いいよ。」

と やさしく 言いました。あきらさん、いっぺいさん、えいじさんも「きのうは、ごめんね。たろうくんの すんでいる ところも いいところなんだね。」

と 言っけて いっしょに あそびました。



たろうさんが、えがおで 家に かえって 学校の できごとを話すと お母さんが、

「よかったね。たろうの家は、すこし とおいけれど、いろんな虫がたくさん いるし、おほしさまも たくさん 光ってるわ。お母さん、かぞくみんなが えがおで くらせる ところが 大すきよ。」と言いました。そして、にっこり うなづく たろうに

「みんなの すんでいるところは、どこでも かならず いいところなのよ。

こどもたちは、そこで、いろいろな 思い出を つくりながら 大きくなっていくの。じぶんの そだった ところを『ふるさと』って いうのよ。たろうの『ふるさと』は、ここよ。」と 話してくれました。



「『ふるさと』かあ。いいことばだね。一人ひとりに たいせつな『ふるさと』があるんだね。ぼくも ここが 大すきだよ。大すきなかぞくも いる 『ふるさと』だね。」

たろうの えがおが きらきら かがやきました。

「ふるさと」大すき

教材の見方

誰にとっても、生まれ育った場所「ふるさと」は、かけがえのない大切なものであり、自己の形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたって大きな精神的な支えとなるものである。愛情あふれる家族、温かい地域の人々、多くの大切な思い出、懐かしく心に染み入る風景はかけがえのないものである。しかし、差別によって、愛する「ふるさと」を名づけることができない現実がある。今も残る同和問題を解決していくためには、「生まれた場所・住む場所によって差別されることがあってはならない」ことを、幼い頃より学んでいくことが必要である。

児童には、「ふるさと」の意味を知らせ、一人ひとり住む場所は違っていても、お互いがそれぞれの「ふるさと」を尊重し合っていくことの大切さに気付かせたい。そして、誰もが、胸を張って「ふるさと」を名づける社会づくりの第一歩とし、住む場所によって仲間はずしにすることは、まちがっていることに気付かせたい。

指導のねらい

「ふるさと」のよさやすばらしさを知り、「ふるさと」に愛着がもてるようにする。

生まれた場所、住む場所によって差別をすることなく、それぞれの「ふるさと」を尊重し合おうとする心情を培う。

留意事項

住む場所により仲間に入れてもらえないことを押さえて、たろうのつらさを考えさせたい。その際、低学年の児童は生き物に関心が強いいため生命尊重に視点が移ってしまわないように気を付けたい。

私たちは、郷土の自然や文化に触れ、人々との触れ合いを深めることで、それぞれ自分の「ふるさと」に対する愛着がわいてくる。それゆえ「ふるさと」とは、存在そのものが尊重されるべきものであることを心に留めておきたい。

児童の心の中に、生まれた場所、住んでいる場所に対して大人からのまちがった情報や偏見により差別心が芽生えないよう今後の指導につなげていきたい。

一人ひとりが、自分の住んでいる場所のいいところを感じ、紹介し合うことでそれぞれの「ふるさと」を尊重し合おうとする心情を培いたい。